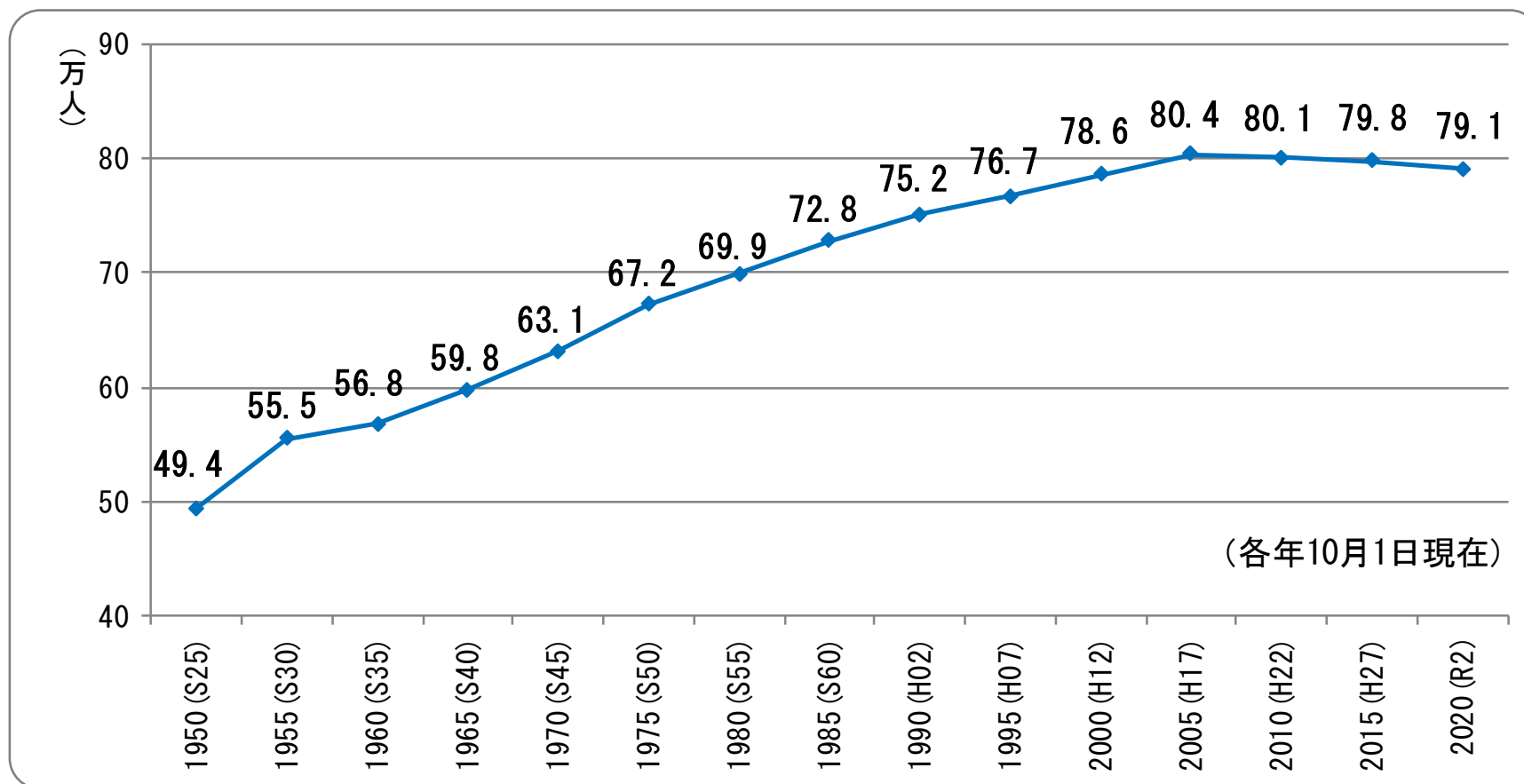


浜松学のあり方検討委員会報告書

令和8年3月

浜松市の現状 ～総人口の推移～

2020年10月1日現在の国勢調査による本市の人口は、79.1万人となり、2005年の80.4万人をピークに減少に転じている

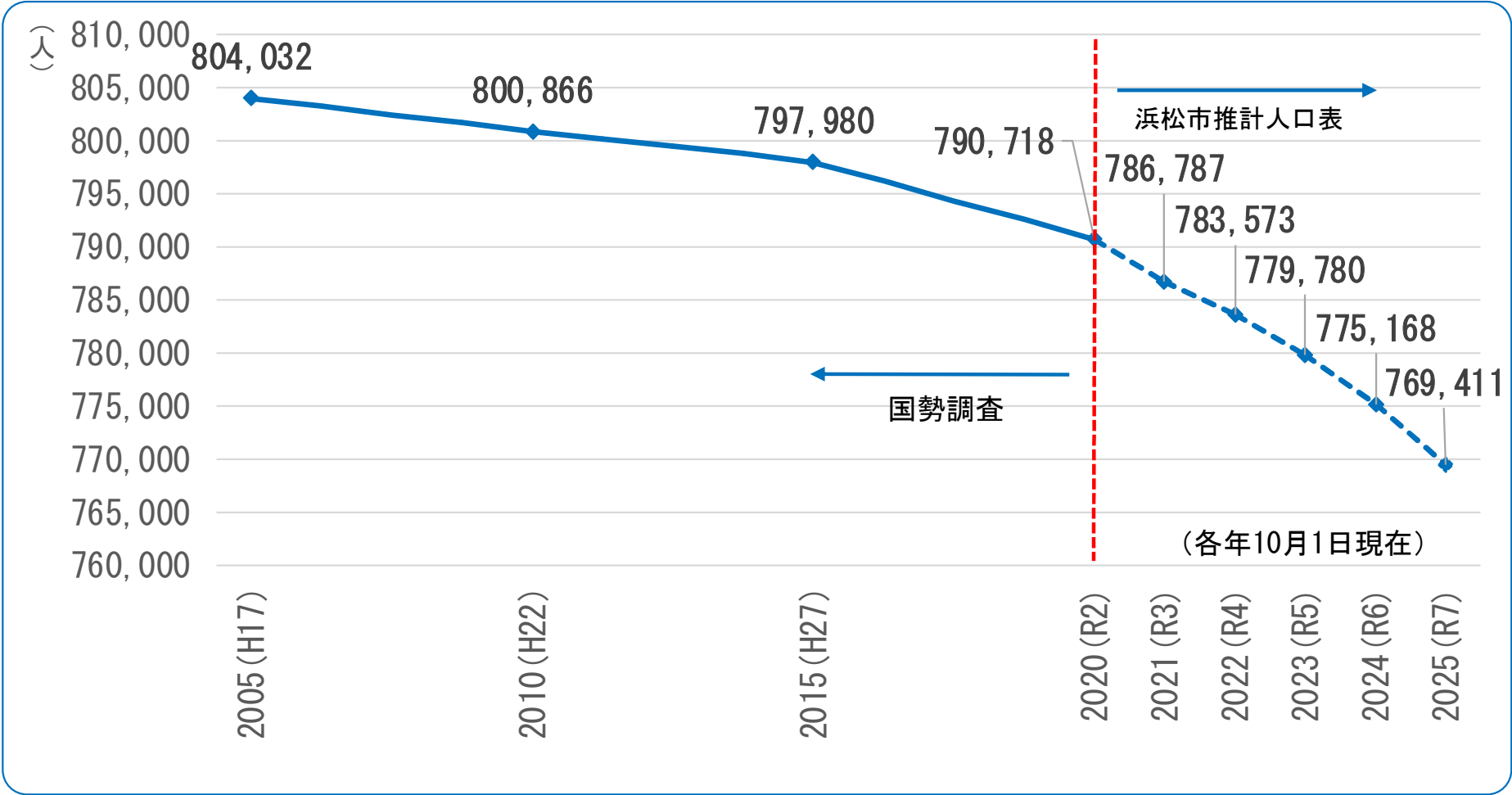


出典：総務省「国勢調査」を基に作成

※2000 (H12) 以前の数値は現市域による集計値

浜松市の現状 ～総人口の推移～

年間減少数は拡大傾向にあり、人口減少スピードが速まっている



出典：2005(H17)～2020(R2)は、総務省「国勢調査」、
2021(R3)以降は、浜松市文書行政課「浜松市推計人口表」を基に作成

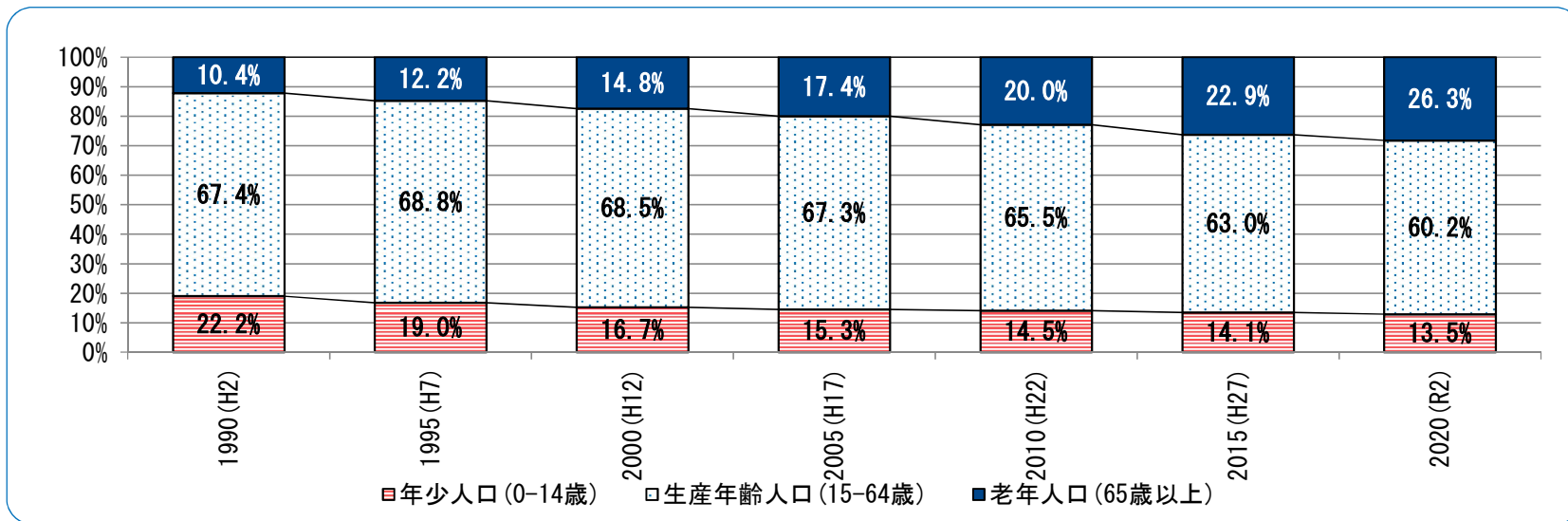
浜松市の現状 ～年齢3区分別人口構造の変化～

本市の人口構造は、年少人口（0歳以上14歳以下）及び生産年齢人口（15歳以上64歳以下）は減少傾向、老年人口（65歳以上）は増加傾向にある

(人)

区分	1990 (H2)	1995 (H7)	2000 (H12)	2005 (H17)	2010 (H22)	2015 (H27)	2020 (R2)
総人口	751,509	766,832	786,306	804,032	800,866	797,980	790,718
年少人口(0-14歳)	142,911	128,424	119,975	116,137	112,093	107,730	101,737
生産年齢人口(15-64歳)	516,798	524,902	529,298	524,774	499,213	480,428	465,944
老年人口(65歳以上)	91,521	113,403	136,923	160,086	181,347	209,822	223,037

※各年10月1日現在



出典：総務省「国勢調査」を基に作成

浜松市の現状 ～社会移動の状況～

地域別人口移動の推移では、転出超過の傾向がつづいており、コロナ禍の影響により2020年から2022年までは、転出超過数は減少したが、2024年はコロナ禍前の水準に戻っている。特に、東京圏への転出超過が大きく、2025年は、1,163人の転出超過である

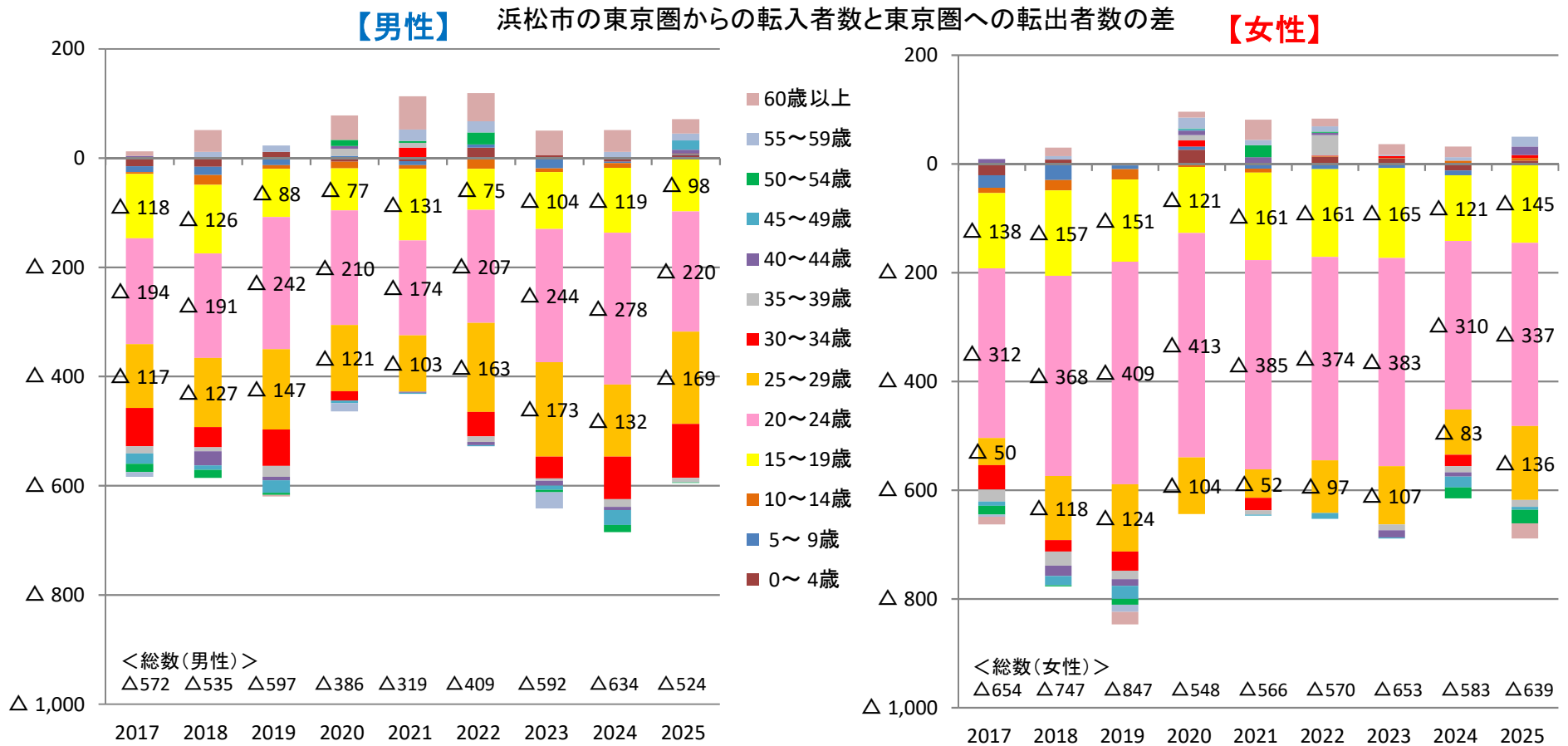
(人)

地域	2015 (H27)	2016 (H28)	2017 (H29)	2018 (H30)	2019 (R1)	2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)
総数	△ 304	△ 606	△ 305	△ 1,291	△ 854	△ 233	△ 192	△ 299	△ 498	△ 845	△ 884
北海道	△ 12	△ 8	△ 5	15	12	△ 33	△ 51	△ 30	△ 31	△ 54	16
東北	18	△ 55	38	△ 37	△ 34	20	△ 15	△ 16	△ 26	26	4
北関東	51	△ 46	21	△ 52	46	△ 1	△ 9	57	76	△ 2	△ 5
東京圏	△ 1,063	△ 1,114	△ 1,226	△ 1,282	△ 1,444	△ 934	△ 885	△ 979	△ 1,245	△ 1,217	△ 1,163
中部	605	472	615	331	537	818	458	623	615	338	330
(うち静岡県)	(724)	(735)	(748)	(640)	(668)	(950)	(477)	(652)	(734)	(613)	(761)
関西	△ 20	△ 121	3	△ 250	△ 43	△ 222	△ 56	△ 171	△ 191	△ 139	△ 180
中国・四国	210	250	225	128	208	217	383	219	278	269	144
九州・沖縄	△ 93	16	24	△ 144	△ 136	△ 98	△ 17	△ 2	26	△ 66	△ 30

出典：総務省「住民基本台帳人口移動報告」を基に作成

浜松市の現状 ～社会移動の状況～

東京圏との社会移動を見ると、男女とも15歳以上29歳以下の若者の転出超過数が多く、特に20歳以上24歳以下の女性の転出超過が大きい



出典：総務省「住民基本台帳人口移動報告」を基に作成

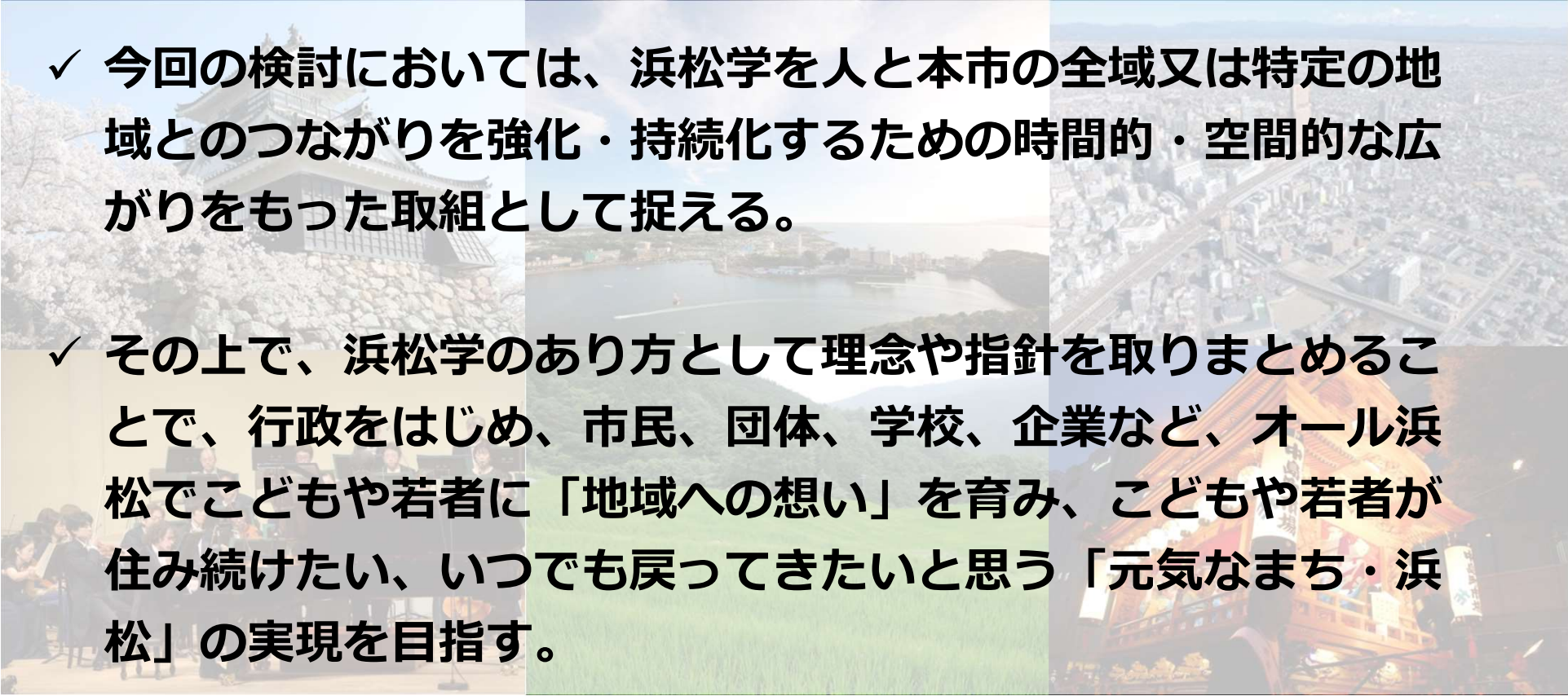
人口減少により、担い手不足など地域経済への影響が出ている中で、このまま人口減少が続けば、地域コミュニティが停滞し、地域の活力の維持が困難になるなど様々な弊害が生じることが懸念される。



人口減少局面の転換や人口減少社会への適応に向けて、子どもや若者の地域愛を育み、成長後も地域への関心やつながりを保ち、若年層の転出抑制及び転入増加につなげるための「浜松学」のあり方を検討する。

- ✓ 本市は、12市町村合併を経て、広い市域に都市部、市街地、郊外地、中山間地域が併存するとともに、人口の流動性も高く、多様性を持つまちである。
- ✓ こどもや若者の地域への誇りや地域愛を育み、地域への関心を高める取組は、市民、団体、学校、企業など、様々な主体による活動において幅広く実施されており、特定の方法論に限定するものではない。
- ✓ 特定の地域やテーマを学習、研究する「ふるさと学※」や「地域学※」が各地域で多岐にわたり展開されており、これを前提として、本市においては、さらに広い概念で「浜松学」を捉える必要がある。

※ふるさと学は、自分の生まれ育った地域や現在住んでいる地域について、地域学は、特定の地域を対象として、その歴史、文化、自然、産業、人々の暮らしなどを総合的に学ぶもの。

- 
- ✓ 今回の検討においては、浜松学を人と本市の全域又は特定の地域とのつながりを強化・持続化するための時間的・空間的な広がりをもった取組として捉える。
 - ✓ その上で、浜松学のあり方として理念や指針を取りまとめることで、行政をはじめ、市民、団体、学校、企業など、オール浜松でこどもや若者に「地域への想い」を育み、こどもや若者が住み続けたい、いつでも戻ってきたいと思う「元気なまち・浜松」の実現を目指す。

目指す姿

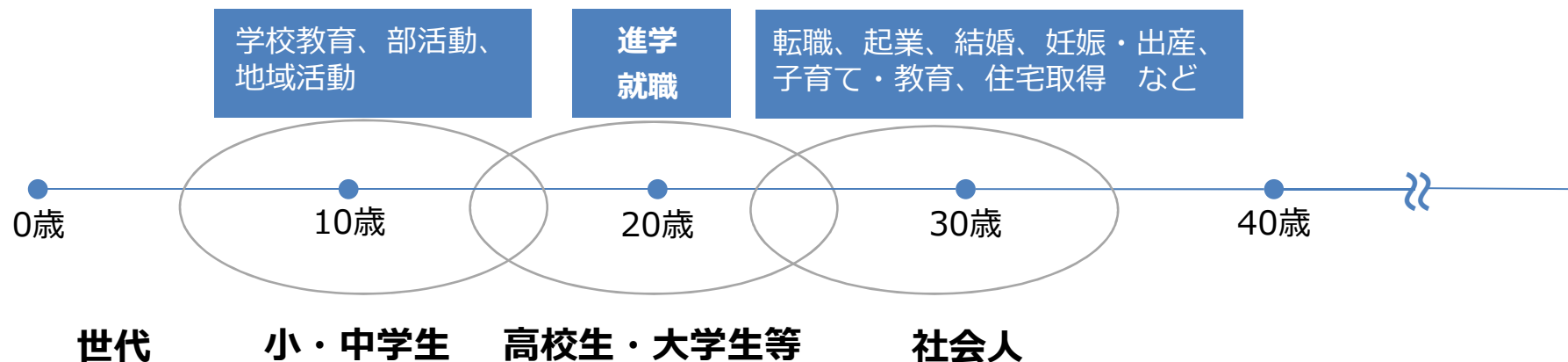
**こどもや若者が
住み続けたい、いつでも戻ってきたいと思う
「元気なまち・浜松」の実現**

基本理念

進学、就職、転職、起業、結婚、妊娠・出産、子育て・教育、
住宅取得などの人生の節目において、

**浜松で暮らすこと、戻って来ることを望み選んで
もらえるよう「地域への想い」を育む。**

- 対象とする年代は、地域のことを理解しはじめる小学生から、人生の様々な節目に直面する30代までを想定する。
- 「現在、浜松に住んでいる人」を主としながら、いずれ浜松に戻ってくることや関係人口としての存在も想定し「浜松に関わる意志がある人」も含む。

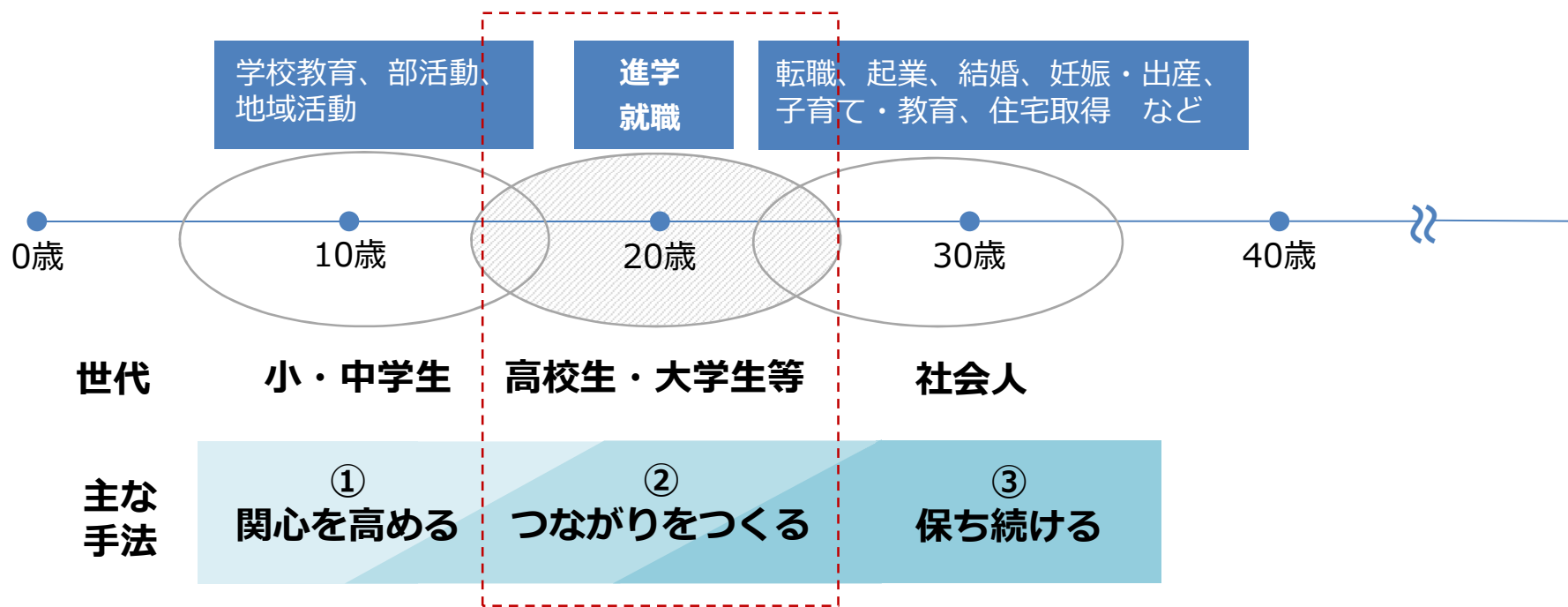


1 地域の魅力を知り、体感することで
地域への関心を高める

2 地域や人とのつながりをつくる

3 地域や人とのつながりを保ち続ける

小・中学生には「①関心を高める」、
高校生・大学生等には「②つながりをつくる」、
社会人には「③保ち続ける」手法を主とする。



- 「地域への想い」を育むためには、浜松に生まれ、育つ子どもの成長段階に応じたアプローチが重要。
 - 対象の中でも、地域との関わりが薄くなり、市外への転出が増える高校生・大学生年代の若者が特に重要なターゲットとなる。
-

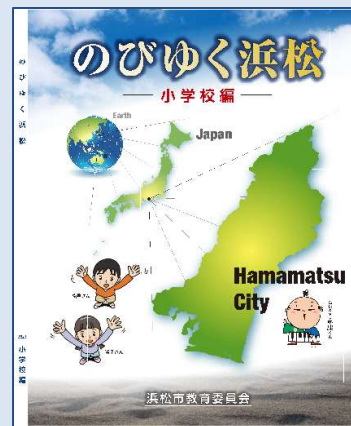
取組事例紹介 <浜松市>

～地域の魅力を知り、体感することで地域への関心を高める～

のびゆく浜松

浜松市の特徴、産業、歴史等をまとめた冊子であり、主に社会科の授業の副読本として活用。小学校編と中学校編があり、昭和30年度に初版が発行され、定期的に改訂を行っている。

のびゆく浜松小学校編
【あとがき（抜粋）】
「のびゆく浜松」には、
そのような浜松の宝物を
詰め込んであります。みなさんは、この「のびゆく浜松」を読み、様々なことについて調べること
で、浜松のことをさらに好きになり、私たちの浜松を誇りに思うようになるでしょう。



浜松みらいっこ事業

市内の小中学生が夏休み期間中に地元企業等へ直接訪問し、機械加工の学習やプログラミング体験、浜松注染体験など、企業が有する優れた技術やノウハウを活かした様々なプログラムを体験する。



出典：令和6年度浜松みらいっこ事業レポート
https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/documents/164041/r6miraikko_houkokusyo.pdf

取組事例紹介 <先進事例>

～地域の魅力を知り、体感することで地域への関心を高める～

郷土愛プロジェクト（上伊那広域連合）

8市町村で構成された上伊那広域連合が主体となって、関係団体と連携しながら、「つなぐ」をキーワードにキャリア教育に関する事業を実施している。

・子どもの未来応援団

次世代育成や地域づくりにかかわる実践を行っている学校、地域団体に助成金を交付することで、子どもたちや地域住民が、希望と目標をもって主体的、積極的に活動できるよう支援している。



出典：
郷土愛プロジェクト
キャリア教育情報サイト
<https://inadani-kyodoai.jp/>

マチカドこども大学

小田急不動産株式会社と多摩大学が協力し、小学生に向けた学びの場を開講。地域の人たちが集うコミュニティ施設を会場に、大学生や地域企業などが講師となり、地域農業を学ぶ機会や住んでいるまちを知るなど、横断的な「探究型講座」を提供している。

地域での循環型教育を醸成することをビジョンに掲げ、地元への愛着心の醸成を図っている。



出典：マチカドこども大学 HP
<https://www.machikado-uni.com/>

取組事例紹介 <浜松市> ～地域や人とのつながりをつくる～

17

探究型の学校独自教科「地域」

(静岡県立浜松湖北高等学校佐久間分校)

2年時に地域の自然、歴史、文化、産業、課題と課題解決に向けた取組事例やアイデアを地域の方などに学び、3年時にかけて、課題解決に向けた取組を生徒自身で考え、実践する。

放置竹林整備により生じた廃材となる竹を使い、地域幼稚園園児と遊ぶためのおもちゃを作製し、交流へとつながった。



出典：静岡県立浜松湖北高等学校佐久間分校 HP
<https://www.edu.pref.shizuoka.jp/sakuma-b/about/features.html>

高校生発！ 広告代理店

(浜松学芸高等学校 社会科学部 地域調査班)

若者が市外に流出し、地域経済が停滞してしまうことを課題と捉え、地域の観光資源や産業文化に焦点をあてたPR動画やポスターを高校生の目線で制作することで、若者をはじめとした様々な方に地域の魅力を伝える広告代理店として取り組む。地域や企業に潜む魅力にスポットライトをあてることで、浜松の魅力を次の世代に受け継いでいく。



出典：浜松市地方創生SDGsコンテスト 優秀賞受賞事例
<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kikaku/sdgs2/gakugei.html>

取組事例紹介 <先進事例> ～地域や人とのつながりをつくる～

鯖江市役所JK課 (福井県鯖江市)

行政やまちへの関心が少ないと言われる女子高生をまちづくりの主演とし、市役所とタッグを組んだ試み。既存のプロジェクトへ女子高生たちを巻き込むのではなく、女子高生自身がやってみたいまちづくり活動を提案し、市役所をはじめ市民団体や地域の大人たちを巻き込む「ゆるさ」を重視した新しい市民協働推進のモデル。



出典：鯖江市役所JK課HP <https://sabae-jk.jp/>

島留学 (島根県立隠岐島前高校)

島外から人を呼びこみ、島内全域をフィールドにした島ならではの教育を展開。地域課題解決型学習を行うなかで、地域のことを知り、地域の大人と話すことができる。地域のあたたかさや、いつか地域に戻ってきてほしい、地域を支えてほしいという大人たちの思いが伝わる。さらには、いつかこの地域に戻りたい、戻らないとしても地域になんらかのかたちで貢献したいという思いが子どもたちの中に芽生える。



出典：しまね留学 島根県立隠岐島前高等学校
<https://shimane-ryugaku.jp/archives/school/dozen/>

取組事例紹介 <浜松市> ～地域や人とのつながりを保ち続ける～

地域の祭り

市内では浜松まつりや姫様道中、みさくぼ祭など各地域で特色のある伝統的な祭りが開催されている。
観光イベントとして、市内外に浜松の魅力を発信する絶好の機会であるとともに、祭りに参加するために浜松に帰ってくる出身者も多い。



出典：浜松まつり公式ウェブサイト
<https://hamamatsu-daisuki.net/matsuri/>
浜松市姫様道中公式サイト
<https://himesama.himekaido.com/>
水窪情報サイト
<https://www.misakubo.net/>

いっかもないか事業 (水窪協働センター)

人口減少・少子高齢化により地域の活動などを維持することが困難になってきているという課題に対して、水窪PRボックス「いっかもないか」の作成、水窪の今を発信、水窪応援団の結成など、水窪出身者や水窪を応援してくれる人たちとのつながりを強固にするための事業。



取組事例紹介 <先進事例> ～地域や人とのつながりを保ち続ける～

くまらバ (熊本県)

熊本県出身者向けLINE公式アカウント。進学などで県外に出た若者のUターンにつなげることを目的に実施。熊本県内の企業、インターンシップ、業界イベントの情報の提供や熊本の特産品、名所、イベントなど、地元の魅力を再発見できる情報を配信している。



出典: 熊本県移住定住ポータルサイト「KUMAMOTO LIFE」
<https://www.kumamoto-life.jp/>

ヒダスケ! (岐阜県飛騨市)

飛騨市の人々が持つちょっとやってみたいことや困りごとの種、アイデアに対し誰でも参加できる、飛騨市と関わるためのプログラム。

飛騨市を助けたオカエシとして、地域の加盟店で使えるさるぼぼコイン500円分がプレゼントされる。



出典: 総務省 地域への新しい入り口『二地域居住・関係人口』ポータルサイト

<https://www.soumu.go.jp/ka/nkeijinkou/region/index.html>



- ✓ 小中学生においては、総合的な学習の時間やキャリア教育など、主に学校教育課程を通じて、農業、伝統文化、福祉、環境など 複数の分野で地域のことを知り、自ら調べ、魅力を発見する機会が確保されており、地域への関心を高める取組は行われている。
 - ✓ 高校生や大学生年代の若者においては、一部の授業やサークル、有志などによって、地域活性化や商品開発などの活動が積極的に行われている。一方で、それらは個々の学校や団体の活動にとどまっており、地域や人とのつながりをつくる機会が市域全体で確保されているとはいいがたい。
 - ✓ 高校生が、地域の大人と対話し、関係性を構築できると、地域の大人が相談相手になるなど、将来的に地域に戻ってくる可能性は高まる。
-

- ✓ 市内に在住する社会人は、浜松に住むことを選択した人であり、長く住み続けてもらえるよう、魅力的で働きやすく、暮らしやすいまちづくりをすすめて、次の世代に浜松の魅力を伝えてもらうことが重要である。
 - ✓ 市外へ転出する場合にも、それ以前に「地域への思い」を育み、本人が能動的に浜松と関わろうとする意志を持ち、いつでも戻って行くことを選択できるようにすることが重要である。
-

1. 小中学生が地域への想いを育むための方策の促進について
 2. 高校生や大学生年代の若者が地域とつながる取組の強化について
 3. 浜松に想いを持つ市外在住者との関わりを保つ方策について
 4. 地域への想いを育む上で必要な体制について
-

1. 小中学生が地域への想いを育むための方策の促進について

学校教育課程では様々な取組が行われており、これらを継続していくために必要なことや、より効果的な手法はないか。

- 地域の歴史や伝統・文化に触れる機会をより積極的に洗い出し、子どもたちに体験させ、地域への誇りや地域愛を育むことが重要である。
- 浜松市の特徴、産業、歴史等をまとめた教材である「のびゆく浜松」は、地域を知る上で素晴らしい資料であり、更なる活用を検討すべきである。
- 中学校の部活動の地域展開は、学校から地域へと活動主体が変わることから、中学生が地域や人とつながる機会となる可能性を秘めている。

2. 高校生や大学生年代の若者が地域とつながる取組の強化について

高校生や大学生など若者と地域とのつながりの拡充やより効果的な手法はないか。

- 若者を地域や人とつなげるためには、取組に参加させるだけではなく、若者が主体的に参画し、挑戦できるようサポートすることが重要である。
- 高校による素晴らしい取組などについて、一過性でなく継続的に、一部ではなく多くの若者に広めていく工夫が必要である。
- 若者が地域や人とより深く関わられるよう、財政面でも支援する仕組みがあると良い。
- 学校と地域の連携や、探究活動の深化などを促進する国の高校教育改革を踏まえた取組を注視していく必要がある。

3. 浜松に想いを持つ市外在住者との関わりを保つ方策について

いずれ浜松に戻ってくることや関係人口としての存在も想定し、浜松市に関わる意志がある市外在住者、特に若者に対し、どのような方策により、浜松への想いをつないでいくことができるか。

- 市内在住者だけではなく、市外から戻ってきた若者や市外在住者に調査をし、実態を把握することが重要である。
- 市外在住者に向けては、不特定多数に向けたSNS発信や、ネットワークを通じた呼びかけが主となる。東京圏よりも浜松で働き、生活することのメリットをコスト面からもアピールすることも必要である。
- 浜松に定住することだけに着目するのではなく、ふるさと住民登録制度や二地域居住などの国等の動きを踏まえつつ、市外在住者とつながり続けるということも視野に入れるべきである。

4. 地域への想いを育む上で必要な体制について

地域への想いを育み、同時にそれを地域自体の活力とするために地域、学校、行政、団体などにより、どのような体制や役割分担が必要か。

- 様々な団体がそれぞれに活動するだけでなく、市全体としてまとまって活動していけるよう体制を整えるべきである。
- 実践の担い手がどういうものなのか、またそれをどのように育てていくのかということを検討した上で、財政措置、人材配置を含めて必要となってくる。
- オール浜松で取り組んでいくためには、本委員会で取りまとめた浜松学のあり方を広く行政や市民へ浸透を図り、共通認識にしていくことが重要である。

趣旨

地域への関心を高め、地域愛を育み、成長後の居住や地域との関わりを促し、若年層の転出抑制と転入増加につなげるため、浜松学のあり方検討委員会を設置

委員

氏名	所属	備考
山名 裕	浜松市 副市長	委員長
下鶴 志美	浜松市教育委員会 委員	
井熊 正浩	浜松商工会議所 常議員 (情報文化部会 部会長)	
小田切 徳美	明治大学農学部 教授	
高木 邦子	公立大学法人静岡文化芸術大学 文化政策学部国際文化学科 教授	

第1回 2024年12月25日（水）

- 1 開会
- 2 挨拶
- 3 委員紹介
- 4 浜松学のあり方検討について（概要）
- 5 議事
 - （1）市内・他都市における取組事例の報告
 - ①浜松市内の事例
 - ②他都市事例
 - ③若者の意見
 - （2）意見交換
＜テーマ＞
 - ①市内や他都市における取組事例や若者の意見を踏まえての所感や関連する事例等
 - ②若者に浜松への愛着をもってもらうために重要なことや必要な要素

地域の愛着を育むことにつながる事例や、若者の地域への愛着の状況などを紹介した。委員の専門的な観点から、地域の魅力を知り、地域への関心を高めることについて、考え方や有効な手法について議論した。

第2回 2025年3月21日（金）

- 1 開会
- 2 挨拶
- 3 議事
 - (1) 浜松学のあり方の骨子（案）について
 - (2) 地域とのつながりをつくり、成長後も保ち続ける取組について
 - ①他自治体の事例
 - ②浜松市の事例

※（1）（2）のそれぞれの説明を踏まえ、意見交換を実施

第1回の意見を踏まえ、目的や手段などをまとめた浜松学のあり方の骨子を示した。また、地域への想いを育む手段として「地域とのつながり」に着目し、他自治体及び市内の事例を紹介した上で、課題や必要な要素、各委員の経験に基づく取組事例などについて意見交換をおこなった。

第3回 2025年10月24日（金）

- 1 開会
 - 2 挨拶
 - 3 議事
 - (1) 浜松学のあり方検討委員会報告書（案）について
 - (2) 意見交換
- ＜テーマ＞
浜松学のポイントや検討課題について

第1回・第2回での議論を踏まえ、取りまとめた「浜松学のあり方検討委員会報告書（案）」について、全体の構成や内容、また浜松学のポイント、検討課題について、これまでの議論を踏まえたご意見をいただくとともに、今後本市が具体的に取り組むべき方策について、意見交換を行った。

第4回 2026年2月17日（火）

- 1 開会
- 2 挨拶
- 3 議事
 - (1) 浜松学のあり方検討委員会報告書（最終案）について
 - (2) 意見交換

これまでの議論や委員からのご意見を踏まえ、課題への提言を記載した浜松学のあり方検討委員会報告書の最終案について追加のご意見をいただくとともに、今後の市への期待や必要な取組、本委員会の全般的な感想をいただいた。追加のご意見を反映させた修正案をもって、浜松学のあり方検討委員会報告書成案とした。